

滋賀建設会だより

第2号 滋賀建設会

ご挨拶

会長 山岡和則

今年度、滋賀建設会の会長に選任されました。昭和53年卒の山岡です。日頃は滋賀建設会の活動にご支援をいただき誠に有り難うございます。

「滋賀建設会」の名称は、立命館大学土木環境系の卒業生の多くがびわこキャンパス卒となってきたことから、今年度の総会で「滋賀衣笠会」を「滋賀建設会」に名称を変更されました。「立命館大学建設会」の滋賀県支部の意味も込めています。立命館大学建設会川那部会長様や前任の滋賀衣笠会中谷会長様の、ネットワークを強化していることという思いを、一歩でも実現していこうと決意しております。

ネットワーク強化の意義は、私なりに3つ考えます。1つは、年代を超えた同窓ということだけで、最初の対人関係の大きなハードルをクリアするという不思議な力を大切に育てて伝承していかねばと考える。時々、同窓の気楽さを感じますが、初めての出会いで長年お付き合いしていたかのごとく話しが進みます。不思議です。2つめは、私の職場で事務の次長さんが、常々おっしゃっていることですが、「事務屋の世界は人間関係でもっている。人間関係を大切にせなアカン」と。これは、私たち技術屋も、大いに見習うべきところと感じています。人間関係の一つとして、このネットワークを使っていきたい。3つめは、ストレスの多い日常業務の中で、心の病というものが普通のことになってきており

ます。こんな中で、壁にぶちあたった時、気持ちを和らげたり、相談したり、助けてもらえるつながりとして、このネットワークが、少しでも力になってくれたらと思います。

こんな事で、この「滋賀建設会」のネットワークが皆さんの力になればとの思いです。小さなネットワークから、一つひとつ大きな輪へと結集していこうではありませんか。今後とも、会員の皆様のさらなるご支援ご参加をよろしくお願い申し上げます。

元気な建設会を

立命館大学建設会

会長 川那部隆二

みなさんこんにちは。昨年10月の立命館大学建設会総会におきまして、滋賀衣笠会(当時)の推薦により、建設会会長を仰せつかりました。大変重責ではありますが、皆さんのご支援をいただきながら、無事努めさせていたしておりますこと、この場をお借りいたしまして厚くお礼申し上げます。

さて、会長就任以来、他府県の支部総会にお招きをいただくことが多くなりましたが、いづこの支部も、会の活性化というのが共通の課題となつています。例年、参加者が固定されつつあり、同じ顔ぶれであるならまだしも、参加者数も年々漸減してきているというのも共通の悩みがあります。昭和年代の卒業生はそれなりに集まってくるんですが、平成年代の卒業生の出席は少なく、若い皆

さん方の参加を切望していると、このが実情です。各卒業年次毎に幹事をおいたり、若年層ほど会費を割引したり、滋賀県同様、さまざま工夫を凝らしておられます。

私も各支部の総会に出席するたびに、「元気な建設会を」と挨拶しておりますが、やはり、元気になるためには若い皆さんの参加がどうしても不可欠であります。そのためには、参加して魅力が感じられる、そして参加したいと思える建設会となるのが大事だと、つくづく感じていっている頃です。

今年の3月に、天津市内のホテルで開催された、建設会学生会部の環境都市系卒業記念パーティーに出席させていただきましたが、200名くらいの卒業生が参加されており、皆さん本当に元気で会場は熱気に溢れていました。この元気な人材が社会に出て、この元気で活躍してくることを、心から願った次第です。

少し古い話で恐縮ですが、国土交通省の河川局長をつとめられた竹村公太郎さんが、以前、土工協の機関誌に「人材が未来を切り開く」というエッセイを寄稿されていました。そのなかで、「社会や組織を発展させる重要なインフラはいくつかあるが、それらの中で最も重要なものが人材である。ただし、今、人材がいるだけでは不十分である。人材がいて、新たに人材が入ってきて、その人材が育つ、この3つの要素が不可欠である。」と書いておられました。建設会には、まさに、いろいろな職業に就き、いろいろな地で活躍されている良き人材がたくさんおられます。そして毎年、学生部会から新しい人材が入ってこられます。会員が一堂に会する、建設会や各支部の総会には、同じ大学を卒業した先輩、後輩として、お互いの情報を交換できる絶好の機会、そして、まさに「築十橋木」、土木の本質で

あります。もの作りの喜びを伝えていく、良き機会であると思えます。

同窓とは思議なもので、初対面の間柄であつても、母校を介して百年の知己となることも、珍しいことではございません。年代を超えた同窓生としての絆が、より強くなつて、同期との横の繋がりがだけでなく、年代を超えた縦の繋がりにおいて、さらに交流の輪が広がれば素晴らしいと思えますし、人材育成にも繋がっていくのではないかと思います。そして、そんな建設会であることこそが、若い皆さんの参加意欲も促すのではないかと思います。

そんな場づくり、そんな雰囲気づくりを、まずはBSCの地元である滋賀建設会から発信していただけたらと、大いに期待しております。皆さん方ますますのご活躍をお祈りいたします。

月の石とゆめ

昭60年卒

株式会社桑原組

友田昌良



私の子供のころの記憶は、動く歩道・月の石から始まり、小学校の低学年ではありましたが、大阪万博の記憶は、鮮明に残っています。大阪万博は、

日本が戦後復興において、高度経済成長を成し遂げた象徴であり、私の目には、人類の進歩により、「人のゆめはとこまでもかなえられるだろう」と映りました。その後も日本は、オイルショックにより高度経済成長は、絶たれたものの私が社会に出るまで、安定成長を続けてきました。

そして、昭和59年9月、私は、縁あって株式会社桑原組に就職し建設業に携わることとなり、入社当初、右も左もわかりませんでした。小さいころに考えた「人のゆめはとこまでもかなえられるだろう」という言葉が、私の心の中にはありました。いつか自分もそんな風な仕事をしたいという気持ちがあつたのだらうと思えます。入社当時の当社の状況は、公共工事によるインフラ整備推進の真只中で、仕事に追われ、それを、次々こなしていくという毎日でした。その中で私は、主にトンネル工事の施工にあたり、現在までの約25年間で、途中トンネル387m、二重トンネル900m、坂下トンネル636m、牛の鼻トンネル302m、行者山トンネル180m、岩熊第2トンネル800m、七頭トンネル101m、勢浜西トンネル110m、谷田部西トンネル664m、奈崎崎トンネル380m、ホノケ山トンネル1468mで、延べ延長約6,000mのトンネルを施工してきました。

はじめの10年ほどは、トンネル工事ということもあり、山の中で、仕事に没頭し、がむしやりに仕事をしてきたように思えます。そのころは、作業員を含め現場がひとつのチームであるという意識が強く、特にトンネル貫通時の達成感、それまでの苦労や悩みを吹き飛ばすものであつたと思えます。そして、建設業のものづくりというものに、面白味を見出し、大成建設さんの「地図に残る仕事」というフレーズが、心地よく、

自分自身が満足していたように思えます。

それから年を重ね、私も現場の長を果たすようになるに連れ、現場での苦労や悩みも以前に比べ大きくは、なつてきましたが、それと同時に周りからの声というものが、聞こえるようになりまし。その声とは、工事現場の周辺の地元住民や、その事業に携わつてこられた方々の「長年のゆめ」という言葉でした。時には、「生きていくうちにこんな道路ができるなんてゆめのようだ」とか「昔は、町に行くのも一苦労だったのに」などでした。そのとき、私は、幼いころの思い出と、入社時に心の中にあつた「人のゆめはとこまでもかなえられるだろう」という言葉がよみがえりました。私が携わっている建設業は、人のゆめをかなえるという仕事だつたのです。それ以降、建設業の目的が、明確となり、私の仕事についての責任の大きさを理解するようになり、それを成し遂げたときの達成感、以前のものより、大きなものになりました。

そして今思うと、阪神大震災・東日本大震災や異常気象による豪雨、豪雪による災害を目の当たりにし、まだまだ、人間の力など極小さなものであるとは思いますが、すべての人のゆめである、安心して暮らせる社会を作るために努力することが私たちの仕事であると実感しています。そして最後に、建設業界は、近年厳しい場面を迎えています。私が、このようにやりがいのある仕事に携わつていられる機会を与えられたことに感謝し、今後も、「人のゆめはとこまでもかなえられるだろう」というフレーズを胸に、この仕事を続けて行きたいと考えています。

がんばろう ふくしま!

平成 23 年 7 月 1 日から平成 23 年 3 月 31 日まで

の 9 か月間の予定で、滋賀県(南部土木事務所)から福島県(福島市にある東北建設事務所)に災害復旧のための土木技術職員として派遣されている多賀(エフ) 卒(構造研)です。 東北建設事務所では災害復旧工事の発注、監督業務をしています。この「たより」を書いていく時点で派遣されてから4ヶ月半が経ち、派遣期間のちようど



中間を迎えてこちらの生活にもずいぶん慣れてきました。 東北建設事務所には、エフ(卒(水工研))の磯部氏も一緒に派遣されており同じ市内のアパートで(もちろん部屋は別)日々の自炊をしながら勤務しています。特に磯部氏は初めての一人暮らしで張切って家事炊事をしています。この紙面を使ってほんの一部ですが福島の紹介と仕事の状況をお伝えします。

・食・

フルーツ王国ふくしま

福島の方は、自らの県をフルーツ王国と呼んでいます。道路脇の果樹園や畑には初夏から桃、その後には梨、柿、りんごが実をつけて季節の新鮮なフルーツを味わうだけでなく目でも楽しむ

ます。8月初めには、こちらの職員で桃畑をされている方へ選別のお手伝いに行きました。午前中は、早朝から収穫された桃を重さ別に丁寧に分けて詰詰工場へ出荷しました。午後からは桃畑で桃狩りをさせていただきおいしくいただきました。珍しい経験をすることが出来ました。

B級グルメ

福島で外食するときには職員さんや臨時職員さんに薦められるのが「円盤餃子」です。4月から福島入りして災害査定業務を行った新潟県の職員が残した職場周辺の飲食店「キング表」を参考にランキング上位の餃子店に行き、円盤餃子を食べました。皿の上に20個の餃子がぐるりと円盤状に敷詰められた焼き餃子で、餡は野菜が多くてヘルシーで酒の肴にちょうど良いものでした。これもおいしくいただきました。

他にも喜多方ラーメンや三春ゆべし、麦せんべいなど美味しいものがたくさんありますが、近頃は食べ過ぎないように注意しているところです。(こちらに来てからウエストがきつくなりました。汗)

職

肝心の仕事の状況ですが、東北建設事務所には滋賀県の方に同時に土木技術職員として、福島県の南隣の栃木県から2名が派遣されていて、机を並べて災害復旧工事の監督にあたっています。栃木県からは、か月間隔で3班が入れ替わりで派遣されることになっています。現在は第2班が来ています。同じ境遇同士協力しながら業務を行っています。こちらに来て福島県や栃木県の職員と一緒に仕事をしていると、その進め方に3者少しずつ違いがあり、3者の内の誰が正解というものはなく、方言らしきものに気づくことがあります。それに気が

づくたびに改めて滋賀を意識することになり新鮮な気持ちになります。(うまく表現するのが難しく分かりにくいかもしれませんが。)



担当している工事は、地震を受けて路盤やアスファルトにクラックが入った道路の舗装修繕や地震で壊れた橋梁の支保交換、落橋防止システムの修繕、護岸の復旧などです。何れの現場も地震の大きさを物語っておりその復旧工事にたずさわること土木技術職員として貴重な経験をしていると感じています。これから、一気に冬に突入するそうです。風が強く相当冷え込むとこちらの方から聞くのですがそういった中で施工に気を配りながら頑張りたいと思います。

最後に今、発災から8か月経ち福島市内では多くの人々が普段の生活をしていきます。しかし、浜通りで津波の被害を受けたところでは、この10月に堤防の復旧高さが決まるなどこれから復旧工事が本格化するところがあります。また、福島第一原発から漏れた放射能による低放射線被ばくの問題を抱えながらの生活がこれからも続きます。福島県への支援はこれからも必要だと肌で感じており、皆様には心のかかにかにそのことを留めていただければ幸いと願って福島からの「たより」を終わります。

滋賀建設会を 思う

昭53卒 山岡和則

今年度の「滋賀衣笠会」総会で名称が「滋賀建設会」に変わりました。「滋賀衣笠会」は、立命館大学土木環境系の卒業生で滋賀県内に勤務の方、あるいは滋賀県内に在住の方の集まりとして活動してきましたが、若い世代の卒業生は衣笠キャンパスではなく、びわこキャンパスとなり、今回名称を、「立命館大学建設会」の「建設会」をいただき、「滋賀建設会」と変わりました。次の世代である「びわこキャンパス世代」に身近な滋賀建設会としたいという思いもあつてです。

今度、「滋賀衣笠会」は「立命館大学建設会滋賀支部」としての役割を持ち、「立命館大学建設会」の役員も担って来ました。昨年度、「滋賀衣笠会」の川那部様が立命館大学建設会会長に就任されました。このように、「滋賀衣笠会」(改め、「滋賀建設会」)は「立命館大学建設会」との関係は切ることができず、太い関係を今後とも引き継いでいかなければなりません。まして、会長を輩出し、また地元キャンパスを迎えていることなど、「立命館大学建設会」を支える大きな使命を担っています。

今年度から、近隣の同様な団体と交流を始めました。

- ・ 京都「立命館大学建設会京都支部」
- ・ 10月22日(日)京都タワーホテルにて総会懇親会を開催。
- ・ 2年に1回総会懇親会を開催。
- ・ 立命館大学建設会の開催年は休会とし、大学建設会に参加するようにしておられる。
- ・ 参加人員は約1000人規模。
- ・ 高齢者の参加も多く、役員が約50人おられ、全体1000人規模参加を維持されている。
- ・ 若い世代の参加が少ないのが課題。
- ・ 立食形式(椅子はあるが)の懇親会。
- ・ 講演会も同時開催。
- ・ 総会、講演会、懇親会 あわせて15時~20時。
- ・ 奈良「奈良建設会」

- ・ 12月3日(日)猿沢荘にて総会懇親会を開催。
- ・ 参加人員は約500人規模。(滋賀と同規模)
- ・ 高齢者の参加も多く、反対に若い世代の参加は少ない。
- ・ 立食形式(椅子はあるが)の懇親会。
- ・ 講演会と、懇親会の中にプロの歌や演奏も有り。
- ・ 総会、講演会、懇親会 あわせて14時~20時。
- ・ 大阪「建立会」
- ・ 1月開催予定

今後の「滋賀建設会」について、次のように思っております。

- ・ 「立命館大学建設会」との太い関係を維持発展していくために「立命館大学建設会」総会懇親会の開催年は、「滋賀建設会」の懇親会を「立命館大学建設会」の懇親会に置き換え、「立命館大学建設会」総会懇親会へ積極的に参加する。もつて、その年は、「立命館大学建設会」の参加負担のみで、参加者の負担軽減を図る。
- ・ 「滋賀建設会」に若い世代が参加しやすいように懇親会を安価な立食形式として参加費を下げる。若手や女性はさらに参加費を下げる。
- ・ また、小さな単位のネットワークを強化し、滋賀建設会の理解を広げていく。また会の魅力を発信し、参加するメリットをPRする。さらにネットワークを広げ、滋賀建設会、立命館大学建設会に発展させていく。

さらに広く情報を発信し、会への理解を深めてもらい、参加を促す。

この年齢になって、人との出会いや繋がりを貴重な財産と感じています。私にとって滋賀建設会は大切なネットワークです。先輩が作り上げてくれたこの会を、恥ずかしくなく引き継いでいかねばと思っております。今後とも役員会や総会で皆さんに議論していただき、滋賀建設会をより発展させていきたいと考えます。

総会の報告

事務局 川又英史

事務局より平成23年度衣笠会総

会の報告と新役員の紹介をいたします。

さる7月29日に琵琶湖ホテルにて平成23年度滋賀衣笠会総会をおこないました。来賓として立命館大学より伊津野和行先生、建山和由先生、建立会(建設会大阪支部)より西村龍一様、建設会京都支部より成松慶太郎様をお招きし、総参加者42名で、盛大に執り行うことができました。

総会での大きな議案として、会の名称を「滋賀建設会」に変更いたしました。ネットワークを強化していく取り組みの一つとして、若い世代のかたに身近な会とするために名称を変更したものです。また、近隣府県の同じ団体からの情報を得るために交流を始めるもので、大阪支部、京都支部からご参加をお願いいたしました。また、ネットワーク強化策の一方策として、運営委員を2名増の15名といたしました。

平成23年度の新役員をご紹介します。

- 会長 山岡 和則(昭和53年卒)
- 副会長 西村 貞雄(昭和44年卒)
- 堀井 信幸(昭和53年卒)
- 石田 良明(昭和55年卒)
- 馬場 敏彦(昭和45年卒)
- 西村 義博(昭和49年卒)
- 監査 服部 喜由(昭和50年卒)
- 山本 一正(昭和51年卒)
- 南部 安賢(昭和53年卒)
- 田中 伸明(昭和56年卒)
- 木村 幹彦(昭和57年卒)
- 守岡 卓蔵(昭和60年卒)
- 小嶋 忠敏(昭和63年卒)
- 稲葉 実(平成6年卒)
- 松延 宏昭(平成6年卒)
- 足立 憲悟(平成11年卒)
- 北川 一哉(平成11年卒)
- 山田 千尋(平成11年卒)
- 松岡 友香(平成13年卒)
- 村田 康行(平成16年卒)
- 玉木 慎(平成20年卒)
- 事務局 川又 英史(平成5年卒)

今年度の懇親会では、立命館大学応援団、チャガールの皆様にご出演をお願いし、校歌、応援歌等演奏をご披露していただきながらの斉唱となり、大変盛り上がりしました。今後とも、楽しんでいただける企画を考えていきます。今年度もよろしくお願いたします。